

活動報告

母性看護学実習における 対象理解を深めるための取り組みの 有用性と今後の課題

The Usefulness and Future Challenge of the Approach
to Deepen the Understanding of Pregnant and
Puerperal Women in the Maternal Nursing Practice

中田 覚子 櫻井 綾香 湯本 敦子 竹内 良美

Satoko Nakata, Ayaka Sakurai, Atsuko Yumoto, Yoshimi Takeuchi

キーワード：母性看護学実習，看護学生，対象理解

Key words : Maternity Nursing Practice, Nursing Students,
Understanding of Pregnant and Puerperal Women

要旨

佐久大学看護学部母性看護学領域では、母性看護学実習の対象のイメージ化ならびに対象との関わり方のイメージ化を図ることを目的とし、臨地実習開始前に、妊娠・出産・育児経験のある女性またはカップルへのインタビューおよびシミュレーション演習を取り入れている。この取り組みの有用性を学生アンケート結果より評価した結果、インタビューは96.6%の学生にとって、母性看護の対象のイメージ化の手助けとなり、シミュレーション演習は93.2%の学生にとって、対象との関わり方のイメージ化の手助けとなっていた。また、91.5%の学生にとって、シミュレーション演習での学びが臨地実習で役立っていた。今後の課題として、インタビューに関しては、①インタビューの目的・期待する成果の提示方法の工夫、②インタビューガイド等の提示の検討、③インタビュー対象の確保が困難な学生の学習環境の整備である。シミュレーション演習に関しては、①学生の緊張を解く工夫、②定期的なシミュレーション演習の機会および多様な事例を経験できる機会の確保、③模擬患者の養成・確保である。

受付日2020年9月29日 受理日2021年1月13日

佐久大学看護学部・別科助産専攻 Saku University School of Nursing and Midwifery Program

I. 緒言

女性の高学歴化やライフデザインの多様化による未婚率の上昇および晩婚化・晩産化により、日本における出生数は86万5234人(厚生労働省, 2019)と激減しており、日本人女性における合計特殊出生率は1.36(厚生労働省, 2019)と低値である。このような超少子化の影響により、日常生活において妊産褥婦や新生児と接する機会がない看護学生は増加している。そのため、これまでの自身の経験を活用して、妊産褥婦や新生児をイメージすることが困難であることから、母性看護学に対し苦手意識をもっている看護学生がいることが報告されている(若井, 道廣, 2010)。

また、本学が所在する長野県の65歳以上人口は32.1%(長野県企画振興部, 2020)であるため、本学のEBN実習(基礎看護学実習)で受け持たせていただく対象の多くが高齢患者であり、認知症を患っている場合もある。EBN実習後の領域別実習の1つである母性看護学実習に臨む看護学生の中には、年齢の近い対象との関わり方に困惑する学生や、認知機能に問題のない健康な対象との関わり方に困惑する学生がおり、その学生数は近年、増加傾向にある。先行研究においても、母性看護学実習における戸惑いの内容として、コミュニケーションによる情報収集の困難さ(西川, 中島, 2019)が述べられており、本学のみならず多くの看護学生が直面している課題だといえる。

このような現状を受け、母性看護学実習の対象のイメージ化ならびに対象との関わり方のイメージ化を図るため、臨地実習開始前に、妊娠・出産・育児経験のある女性またはカップルへのインタビューおよびシミュレーション演習を取り入れた。本稿では、学生アンケート結果から本取り組みの有用性と今後の課題を報告する。

II. 実践内容

1. 妊娠・出産・育児経験のある女性またはカップルへのインタビュー

1) 概要

(1) インタビューの対象

妊娠・出産・育児経験のある女性またはカップル(自分の両親、兄弟姉妹、友人など)

(2) インタビューにおける聞き取り内容

妊娠・出産・育児体験について

(Open Questionでインタビューし、できるだけ自由に語ってもらう)

(3) インタビュー実施後のレポート課題

以下の内容について、A4用紙、横書き、1枚以上3枚以内にまとめる。

① インタビューの対象

② 妊娠・出産・育児体験の聞き取り内容

③ 聞き取りをしてみたの自身の感想

④ 自分(あるいはパートナー)が妊娠・出産・育児をすると仮定した場合、あなたは、どのような妊娠・出産・育児にしたいか。また、自分・パートナー・赤ちゃんのために、どのようなことが出来そうか。

(4) インタビュー課題の提示時期

3年次前期(4月上旬)の母性看護援助論の初回講義時

(5) レポート課題の提出時期

3年次後期の各実習グループの母性看護学実習初日(実習ローテーションにより9月から2月と異なる)

2. シミュレーション演習

1) 概要

(1) シミュレーション演習の実施時期

各実習グループの母性看護学実習初日(学内オリエンテーション時)

(2) シミュレーション事例

臨地実習を想定し、2場面を設定した。

【場面1】産褥1日目の褥婦の検温場面:

- 一般状態および子宮復古の観察
- 【場面2】産褥2日目の褥婦の授乳場面：**
乳房の観察および授乳姿勢の観察
- (3) シミュレーションの実施方法
- ① 学生3~4名でグループを作成
 - ② 教員より、各場面の事例・目標および期待する事項(観察項目や注意事項の一覧)を提示(図1および図2)
 - ③ グループごとに、褥婦との関わり方、情報収集・観察方法を検討(20~30分)
 - ④ グループの代表学生2名による場面1のシミュレーション実施(15分)
 - ⑤ デブリーフィング: 1回目(30分)
学生同士で良い点・改善点を出し合い、その後、教員より助言を行う
 - ⑥ 同一場面のシミュレーションを別の学生2名が実施(15分)
 - ⑦ デブリーフィング: 2回目(20分)
 - ⑧ ④~⑦の流れで事例2も実施
- なお、事例1に関しては、周産期全身実習モデルはな(MW48: 京都科学)を褥婦役として使用し、声は教員が実施した。事例2に関しては、多目的実習用新生児モデルコーケンベビー(LM-026: 高研)を新生児役として使

◇ 状況設定

あなた達(学生2名)は本日より産褥1日目の岩村田華さん(32歳・初産婦)を受け持ちます。朝の申し送りでは以下の情報が得られました。

《朝の申し送りで得られた岩村田さんの情報》

- ・ 昨日の準夜帯(21時30分)に経膈分娩にて3050gの男児を出産した
- ・ 分娩所要時間28時間30分、出血量380ml、会陰裂傷Ⅱ度があり縫合している
- ・ 児のApgar Score 1分値9点(皮膚色-1)、5分値10点、出生後の一般状態は安定している
- ・ 本日の朝6:00に分娩後の初回歩行を行い、ふらつきはなかった

現在、産褥1日目の午前9時30分です。部屋を訪室し、岩村田さんの一般状態及び生殖器の復古の観察を行ってください。問診・視診だけでなく、浮腫や子宮底等の触診も行い観察してください。

◇ 目標

- ① 一般状態の観察ができる
- ② 子宮復古の観察ができる
- ③ 子宮復古に影響を及ぼし得る要因の聴取ができる
- ④ その場に応じた褥婦への配慮ができる

◇ 期待する事項 (※一部抜粋)

- ・ 目標②に関する項目
 - 子宮底の高さ
 - 子宮の硬度
 - 悪露
 - 後陣痛
- ・ 目標③に関する項目
 - 最終排尿時間・尿意の有無・残尿感の有無
 - 最終排便の日時
 - 直接授乳の有無・回数
 - 子宮収縮薬の内服状況 など
- ・ 目標④に関する項目
 - 出産に対する労いの言葉をかける
 - 触診時にプライバシーへの配慮を行う
 - 許可を得てから触診を行う

図1 【場面1】産褥1日目の褥婦の検温場面の事例・目標・期待する事項

<p>◇ 状況設定</p> <p>あなた達（学生2名）は昨日より岩村田さん（32歳・初産婦）を受け持ちしています。朝の申し送りでは以下の情報が得られました。</p> <p>《朝の申し送りで得られた岩村田さんの情報》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産褥1日目の10時より直接授乳を開始した ・2-3時間ごとに直接授乳をしているが、授乳手技には不慣れさがある <p>現在、産褥2日目の9時50分です。朝の検温時、岩村田さんより「次は10時から授乳を行う」との情報を得たため、これから訪室します。岩村田さんの乳房の観察および授乳姿勢の観察を行ってください。問診・視診だけでなく、乳房等の触診も行い観察をしてください。</p> <p>◇ 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ①乳房・乳輪・乳頭を観察できる ②授乳姿勢を観察できる ③その場に応じた褥婦への配慮ができる <p>◇ 期待する事項（※一部抜粋）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標②に関する項目 <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> どのような抱き方で授乳しているか <input type="checkbox"/> 母親がリラックスした姿勢である (頭・背中・腕・足が安定している／首・肩・背中・腕・足が緊張していない など) <input type="checkbox"/> 児の鼻と乳頭が向き合っている <input type="checkbox"/> 児の体が母親の方を向いていて、密着している <input type="checkbox"/> 児の体(耳・肩・腰)が一直線でねじれていない <input type="checkbox"/> 児の体全体を支えている <input type="checkbox"/> 乳輪・乳頭を深くくわえている <input type="checkbox"/> 口唇を内側に巻き込んでいない <input type="checkbox"/> 下顎が乳房から離れていない <input type="checkbox"/> 児が口を外した後、乳頭の形が変形したり、つぶれたりしていない <input type="checkbox"/> 母親が痛みを感じていない ・目標③に関する項目 <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 視診・触診時にプライバシーへの配慮を行う <input type="checkbox"/> 許可を得てから触診を行う
--

図2 【場面2】産褥2日目の褥婦の授乳場面の事例・目標・期待する事項

用し、乳房マッサージモデルⅢ型(LM-045:高研)を装着した教員が褥婦役を実施した。

Ⅲ. 本取り組みの有用性の検証方法

1. データ収集方法

1) 母性看護学実習の最終日に、口頭にて、クラウド型教育支援サービスmanaba(株式会社朝日ネット)におけるアンケート調査への協力を依頼した。その際、①アンケートへの協力は自由意思に基づくこと、②実習成績は母性看護学実習評価

表(ループリック評価表)でのみ評価し、回答の有無や回答内容は成績評価に一切影響をしないこと、③個人が特定されない形で集計し、本学紀要に公表することを説明した。また、manabaのアンケートフォーム上にも、上述の①から③を記述し、説明をした。

2) 母性看護学実習の成績確定後(2020年3月)、妊娠・出産・育児経験のある女性またはカップルへのインタビューレポートの感想部分より、インタビューによって得られた学びの内容について分析させ

て頂きたい旨をmanaba上で説明をした。その際、①母性看護学実習の成績は確定しており、事務(教務課)へ提出済みであること、②レポートが分析対象となることへの協力は自由意思に基づくこと、③分析対象となることに同意が得られない場合には、教員への連絡をお願いしたいことを説明した。母性看護学実習を履修した者のうち、レポート提出をしていた学生に関しては、全員が既読となり、同意が得られなかった者はいなかった。

2. manabaにおけるアンケート調査項目

- 1) 妊娠・出産・育児経験のある女性またはカップルへのインタビューは、母性看護の対象をイメージすることの手助けになりましたか
- 2) シミュレーション演習は、母性看護の対象との関わり方をイメージすることの手助けになりましたか
- 3) シミュレーション演習での学びは、臨地実習における母性看護の対象との関わりにおいて役に立ちましたか

上述の3項目に関し、「全く手助けにならなかった／全く役に立たなかった」「手助けにならなかった／役に立たなかった」「どちらともいえない」「手助けになった／役に立った」「非常に手助けになった／非常に役に立った」の5段階での回答および、その理由

の記述を依頼した。

3. 分析方法

5段階評価の項目に関しては、構成比を算出した。また、自由記述およびレポート感想部分に関しては、①手助けになった／手助けにならなかったと感じた理由、役に立った／役に立たなかったと感じた理由、②インタビューにより得られた効果に関する記述をコード化し、類似する内容別に分類した。

IV. 結果

manabaにおけるアンケートには、母性看護学実習履修者88名のうち、59名より回答を得た(回答率67.0%)。レポート課題に関しては、85名分(96.6%)を分析対象とした。

1. 妊娠・出産・育児経験のある女性またはカップルへのインタビュー

母性看護の対象のイメージ化を図るためのインタビューの有用性について、“非常に手助けになった”と回答した者は16名(27.1%)、“手助けになった”と回答した者は41名(69.5%)、“どちらともいえない”と回答した者は2名(3.4%)であった。なお、“手助けにならなかった”または“全く手助けにならなかった”と回答した者はいなかった(図3)。

インタビューを実施したことにより、“周

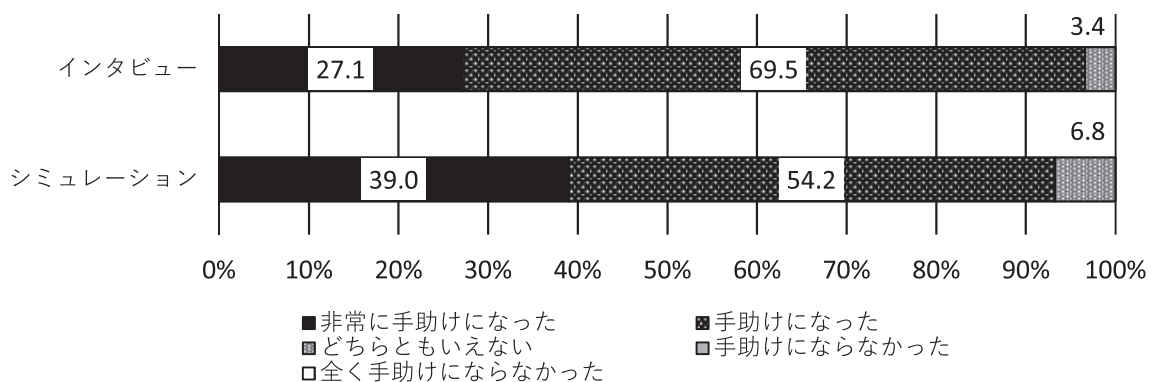


図3 イメージ化を図るための各取り組みに対する有用性の評価

困の人からのサポートの大切さ”や“妊娠・出産・育児の大変さ”、“誰しものが不安を抱くこと”や“アンビバレントな感情を抱くこと”、“母親と父親の感情・役割の違い”や“妊娠・出産に伴う身体の変化”などを知るとともに、“母になる覚悟”や“人生の中で貴重なライフイベントであること”、“子どもが無事に誕生することが奇跡的なことであること”などを実感していた(表1)。

また、インタビューは、母性看護の対象を理解する機会だけでなく、“自分の出生について初めて知る機会”となり、“自分が愛されて大切に育てられていたこと”を知り、“親への感謝の気持ち”や“親孝行・恩返しをしたい

表1 インタビューが母性対象をイメージすることの手助けになったと感じた理由(複数回答)

理由	n
周囲(夫・両親・兄弟姉妹・医療者)の人からのサポートの大切さを知ることができた	47
妊娠・出産・育児の大変さを知ることができた	22
母になる過程を知り、母になる覚悟を実感することができた	15
誰しものが妊娠・出産・育児に対して不安を抱き得ることを知ることができた	14
母親がアンビバレントな感情を抱くことを知ることができた	9
母親と父親の感情・役割の違いを知ることができた	6
妊娠・出産が人生の中で貴重なライフイベントであることを実感することができた	6
妊娠・出産により生じる身体の変化を知ることができた	5
妊娠・出産・育児の大変さ以上に得られるもの(喜び・幸せ)があることを知ることができた	5
子どもが無事に誕生することが奇跡的なことであることを実感することができた	5
妊娠・出産の受けとめ方は個々により異なることを知ることができた	4
妊娠・出産・育児に関する否定的な感情が記憶に残りやすいことを知ることができた	4
父親・母親は協力し合う関係であることを知ることができた	4
子どもの成長を実感できることが母親の自信につながることを知ることができた	3
妊娠・分娩経過は1回1回異なり経産婦でも初めての経験があることを知ることができた	3
妊娠・出産・育児により生活や環境が変化することを知ることができた	3
母親が自責の念を抱きやすいことを知ることができた	2
父になる過程を実感することができた	2
妊娠・出産に関する出来事は鮮明な記憶として残っていることを知ることができた	2
生活環境の大切さを知ることができた	1
出産は“ゴール”ではなく“始まり”であることを知ることができた	1

表2 インタビューを行ったことによる副効果(複数回答)

効果	n
自分が愛されて大切に育てられたことを知ることができた	38
医療者の役割・態度・姿勢について考える機会となった	38
親への感謝の気持ちを抱くことができた	23
初めて自分の出生について知る機会となった	19
自分の父親・母親に対する新たな気づきを得ることができた	17
看護学生として実習に向けた課題を得ることができた	15
母の偉大さを知り、尊敬することができた	10
自分の将来をイメージする機会となった	10
親孝行・恩返しをしたいという気持ちを抱くことができた	5
自分の命を大切にしたいという気持ちを抱くことができた	2

という気持ち”、“自分の命を大切にしたいという気持ち”を抱ききっかけとなった。また、“医療者の役割・態度・姿勢について考える機会”、そして“看護学生として実習に向けた課題を得る機会”、“自分の将来をイメージする機会”となっていた(表2)。一方で、“自分の生まれた時のことや親の思いを聞いただけで終わった(n=2)”という回答もあった。

2. シミュレーション演習

母性看護の対象との関わり方のイメージ化を図るためのシミュレーション演習の有用性について、“非常に手助けになった”と回答した者は23名(39.0%)、“手助けになった”と回答した者は32名(54.2%)、“どちらともいえない”と回答した者は4名(6.8%)であった。なお、“手助けにならなかった”または“全く手助けにならなかった”と回答した者はいな

かった(図3)。

シミュレーションを実施したことにより、“褥婦と関わる際の心構えや知識・技術の確認”や“褥婦が理解できるような声掛けや配慮した言葉掛けなど教科書や参考書だけでは分からない関わり方の留意点”などを学び、“実際の褥婦との関わり方のイメージ化”ができていた(表3)。一方で、“緊張したため、何をしたのかあまり覚えていない(n=1)”という回答もあった。

また、臨地実習におけるシミュレーション演習の学びの有用性について、“非常に役に立った”と回答した者は19名(32.2%)、“役に立った”と回答した者は35名(59.3%)、“どちらともいえない”と回答した者は5名(8.5%)であった。なお、“役に立たなかった”または“全く役に立たなかった”と回答した者はいなかった(図4)。

表3 シミュレーションが母性の対象との関わり方をイメージする手助けになったと感じた理由 (複数回答)

理由	n
メンバーの関わり方の良い点・改善点をみんなで検討することにより、実際にどのように褥婦と関わっていくのかをイメージすることができた	27
褥婦と関わる際の心構えや知識・技術の確認をすることができた	5
褥婦が理解できるような言葉がけ(医療用語を用いない伝え方)や配慮した言葉がけなど、教科書や参考書だけでは分からない関わり方の留意点を学ぶことができた	5
年齢の比較的近い健康な対象との関わり方(障害のある成人期や老年期の対象へ関わるのとは違うということ)が理解できた	2
今までの実習では経験出来なかった学生2名での受け持ちのイメージを事前に持つことができ、ペアの学生とどのような分担で褥婦に話しかけるかを考える良いきっかけとなった	2
プライバシーへの配慮を理解することができた(シミュレーションをやっていなければ、外陰部の傷の確認等もベッド上で普通に行っていた)	1
このような状況だったら、どのように褥婦と関わるのかを事前に考えるきっかけとなった	1

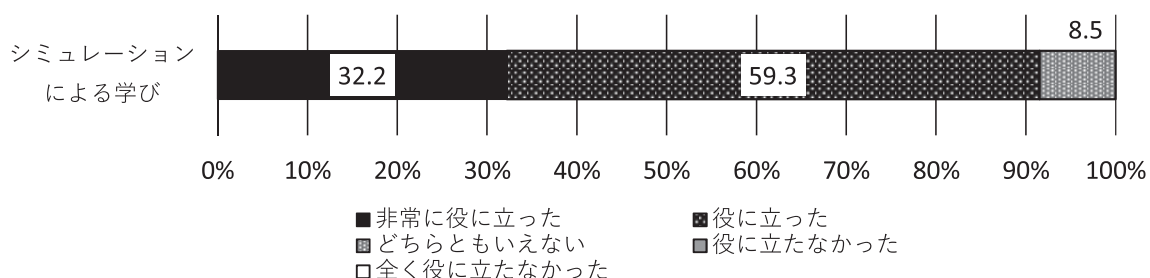


図4 臨地実習における有用性の評価

表4 シミュレーション演習での学びが臨地実習で役に立ったと感じた理由(複数回答)

効果	n
実際に褥婦と関わる際、シミュレーション内容を思い出しながら、落ち着いて(適度な緊張感で)対応できた/対応に困らなかった/スムーズにする対応ことができた	23
話しかけ方やそのタイミング、聞き方を変えるなどコミュニケーションの工夫に役立った	3
観察項目不足が少なくなった/効率よく情報を得ることができた	3
シミュレーションのおかげで、正しい方法で観察することができた	3
少なくとも褥婦に対し失礼や不快感を与えないように配慮することができた	1
聞くことが分からないということがなく、その場で考える力をつけるきっかけになった	1

シミュレーションを思い出しながら臨地で実践することにより、“落ち着いた/スムーズな対応ができた”と実感している学生が多く、“コミュニケーションの工夫”や“正確な観察”、“褥婦への配慮”に役立っていた(表4)。一方で、“シミュレーションでイメージは出来たが、実際に実践してみるのとは違かった(n=2)”、“コミュニケーションについては、返答がそれぞれ異なるため、あまり役に立たなかった(n=1)”という回答もあった。

V. 本取り組みの有用性および今後の課題

1. インタビューの有用性および今後の課題

妊娠・出産・育児経験のある女性またはカップルへのインタビューを実施することは、96.6%の学生にとって、母性看護の対象のイメージ化の手助けとなっていた。また、インタビューは、母性看護の対象を理解する機会だけでなく、自分の出生について初めて知る機会、親への感謝や命の大切さを実感する機会、看護学生・医療者としての役割・態度・姿勢について考える機会等にもなるという副効果が得られた。本インタビュー課題は、3年次前期の4月に提示をしていたものの、実際には、臨地実習開始前の夏休みに実施していた学生が多く、前期の母性看護援助論によって得た知識を持ち合わせながらのインタビューとなった。そのため、具体的な内容も聞きやすく、対象のイメージ化につながると

もに、これまで知らなかった自身の出生についても知る機会になったと考える。また、9月からの臨地実習を目前に控えている時期に課題に取り組んだことにより、看護学生として何ができるのか、医療者に求められている役割は何かということを、考えやすいタイミングであったことが予測される。

一方、3.4%の学生にとっては、本インタビュー課題は、母性看護の対象のイメージ化の手助けにならなかった。自由記述に“自分の生まれた時のことや親の思いを聞いただけで終わった”との理由があったことから、本インタビュー課題の目的やインタビューによって期待する成果の提示の仕方の工夫、インタビューに不慣れな学生を手助けするためのインタビューガイドの提示等を検討する必要がある。

また、本インタビュー課題は、母性看護学実習履修者全員に提示し、成績評価の一部にもなっているが、レポート未提出者もいた。未提出の理由は不明であるが、現在社会の家族形態の多様化や少子化に伴う一人っ子世帯の増加といった背景を考慮すると、インタビュー対象を確保することが困難な学生が実在する可能性がある。そのような学生への対応として、成績評価に一切関与しない妊娠・出産・育児経験者への協力依頼等も検討する必要がある。

2. シミュレーション演習の有用性および今後の課題

臨地実習前にシミュレーション演習を実施することは、93.2%の学生にとって、母性看護の対象との関わり方のイメージ化の手助けとなっていた。また、91.5%の学生にとって、シミュレーション演習での学びが臨地実習で役立っていた。シミュレーション演習により、対象との関わり方のイメージ化が図られ、臨地実習において落ち着いた／スムーズな対応ができた実感している学生が多いことを考慮すると、本シミュレーション演習は、学生が母性看護学実習で直面する“コミュニケーションによる情報収集の困難さ(西川, 中島, 2019)”の軽減に少なからず効果があると考えられる。

一方、6.8%の学生にとっては、シミュレーション演習は、母性看護の対象との関わり方のイメージ化の手助けにならなかった。自由記述に“緊張したため、何をしたのかあまり覚えていない”との理由があったこと、本学の現状として、シミュレーション演習の機会が限られていることを考慮すると、シミュレーション演習に慣れていない学生の緊張を解く工夫や、定期的なシミュレーション演習の機会の確保が必要である。また、8.5%の学生にとっては、シミュレーション演習での学びは臨地実習の役に立たなかった。自由記述に“シミュレーションでイメージは出来たが、実際に実践してみるのは違った”、“コミュニケーションについては、返答がそれぞれ異なるため、あまり役に立たなかった”との理由があったことから、多様な事例を経験できる機会の確保が必要であると考えられる。また、教員が褥婦役を実施するシミュレーション演習では、会話および対応を通じて、コミュニケーション能力の向上が期待できる一方、同一教員による褥婦役では、コミュニケーションの特徴がパターン化してしまう可能性や、学生の緊張感が薄れる可能性を否定できない。

他領域の教員による模擬妊婦のサプライズ登場により、学生の集中力を高めることができた(斎藤, 2020)との報告があることから、本学におけるシミュレーション演習に際しても、褥婦役を他領域教員や地域ボランティアに依頼する等の工夫も検討する必要があると考えられる。しかしながら、模擬患者の確保の困難さ(二村, 2013)も指摘されている。本学においても、本シミュレーション演習の目的を理解し、各事例の意図に合った模擬患者の養成・確保については課題である。

謝辞

アンケート調査にご協力頂きました本学の学生の皆様に感謝致します。

なお、本稿において開示すべき利益相反事項はない。

文献

- 厚生労働省(2019). 令和元年(2019)人口動態統計月報年計(概数)の概況. 2020/08/26, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai19/dl/kekka.pdf>
- 長野県企画振興部(2020). 長野県の年齢別人口をお知らせします(令和2年4月1日現在). 2020/09/03, <https://www.pref.nagano.lg.jp/tokei/tyousa/documents/nenrei0204.pdf>
- 二村良子(2013). 母性看護学領域におけるシミュレーション教育の可能性—米国視察によりシミュレーション教育を考える—. 三重県立看護大学紀要, 17, 75-80.
- 西川明美, 中島初江(2019). 母性看護学実習に有用な学内演習の検討. 日本母子看護学会誌, 12(2), 55-63.
- 斎藤良子(2020). 母性看護学演習におけるシミュレーション教育を活用した授業展開の試み. 朝日大学保健医療学部看護学科紀要,

(6), 59-64.
若井和子, 道廣睦子(2010). 母性看護学に対する看護学生の苦手意識の構造. インターナ

ショナルNursing Care Research, 9(4), 127-133.